昭和二十四年七月二十三日　第三種郵便物認可
昭和五十五年十一月　十五日　発行（毎月一回・十五日発行）

（通第三七七号）

慈光

第三十二巻　第十一号

目次

人生問題と信仰……近角常観…(1)
信を行く旅人抄……池山榮吉…(7)
―二河白道―
御一代記聞書抄（続・一三）……井上善右衛門…(14)
殴州巡遊寸感……西元宗助…(17)
念仏詩抄……木村無相…(20)
如来の誓願は智愚の毒を滅す……花田正夫…(23)

人生問題と信仰

——熊本県会議事堂に於て——

近角常観

一

信仰上の話は、吾々の心の上において絶対にこれを認める実験であって、決して机上の空論ではない、そこで今日は他力信仰の根本義についてお話する。

さて人生問題の範囲はすこぶる広くなってくるが、要するに吾々が此世の中に生れ出て、死ぬまでに起ってきたありとあらゆる問題は皆人生問題である。それでこれを一一色分けしたら種々雑多であろうが、その中で最も吾々に深く感じるのは、職業上の問題、生活上の問題である。

釈尊の仏教をお説になったのも、哲学上だの、倫理学上だのという高尚な学問上の立場からされたのではなくて、その発心された動機は生死病死のためにこの世の中に悶え苦んでいる多くの憐れな人々を如何にしても、この渦中から救い出してやりたいという、極く卑近なる人生問題に触れて修業されたのである。近年東京における青年の間にもさかんに信仰心が萌してきたが、これは全く青年の生活が真面目になってきたからである。でこの信仰というものは、自己と他人との関係において第一歩が開くのである

聖徳太子も、十七条憲法の第一に、

「和を以て貴しと為す、忤うこと無きを宗とす。人皆党あり、また達れる者すくなし。是を以て或は君父に順わずたちまち隣里に違う。然れども、上和ぎ下睦びて、事を論ずるかなう時は、則ち事理おのずからに通じ、何事か成らざらん」

と言われてある通りに、吾々人間社会には和という事は最も大切なことであるが、吾々が真の和を保て居るかどうか、この辺が即ち疑問の出るところである。今吾々が一寸考えて見ると、家庭間においても、友人間においても、真実にへだてのない理想的な交りをしていると思うであろう、いや家庭や友人ばかりでない、宗教上、道徳上の本意である敵を愛するという精神をもって、敵に対しても十分の愛のこころをもって、その敵を感化していると思うだろうが、

顧みて沈思熟慮すれば、事実吾々は真に敵を愛しているものではない、真の和を保って居るものではないと云う事がわかる。実際の場合に、吾々はたしかに敵を愛して居ると思う時は、半面すでに彼は自分の敵であるということを認めているのである。念頭すでに敵と云うような感じがあってはトテモ真の愛ではないのである。この場合安心して彼の犠牲になるの、身を捨てるのと言うことは事実出来て居ない。サアここに人生問題は起きて来る。即ち吾々が絶対の愛、絶対の真を見出すこそが宗教上の問題である。人生必ず一度は此処に突き当ってくる。例えば、人が死の関門を通りぬける時になっては、如何に親密な妻子でも友人でも、死に対する吾々の苦悶を除き去る事は出来ぬ。人がここまで、苦悶してくると、宗教とは自己と他人との関係、換言すれば人と人との関係ではなくして、広大なる仏陀と迷える吾々との間に貫通を得るの問題となってくる。言い換えれば相対界では絶対の力は得られぬと言うのである。そこで聖徳太子は、憲法の第二に、篤く三宝を敬せよ、三宝とは則ち四生の終帰、万国の極宗なり、と言われた。

二

世間では信仰を説く者が、ややもすれば、宇宙がどうの、哲学がどうのと、高尚な学理上の詮索のみにわたる者があるが、吾々の求めるところはそんな学理ではない、空論じやない。吾々はこの日常生活と高大な仏陀の境涯との関係を得たいのである、仏と人との貫通の域に達したいのである。例えばここに一人の大富豪があっても、その富豪が他の貧しい者を救う方法を講ぜなかったならば、両者の間には何等の連絡もないのである。或はまた貧者が救済を求めても富豪がこれを容れなかったら、富者の有難味はないのである。丁度貧しく苦しみ悩める吾々人間同士が寄り合っていても、仏陀の絶対の富、即ち力を得ることが出来なかったらば、仏陀の有難味、宗教の味いは全く無いのである。

今絶対の仏陀と相対の吾々との連絡をつくるのに二つの道がある。一つには、迷える人間が自分で精一杯の力を出して理想的境涯にのぼり、仏陀に達しようとするのである。なお少し分り易く言えば、此処に菩提の岸がある。その岸を自分一人の力で登りつめて菩提の岸頭の境涯はこんなものだと知りたいと努めるのである。ところが実際において自分一人の力でこの岸頭に登りつくすということはすこぶる難事である。私自身の実際から云うと全然不可能である。時に自分の力を信じ切って居る人々の間には、此岸の半分位まで登って居って、未だ見えない岸の上を、こんなものだと思い間違いながら、安心せねばならぬと思って居る人がある。けれども吾々はそんなことをせねばならぬなどと

云うような、仕方なくされたことでは真の安心は出来ないのである。まことの連絡は得られないのである。

然らば、他の一つの道はどんなものかと云うと、前とは全く反対の方法である。即ち世の中の人はすべて悶え悩んで居る、苦しんで居る、藻掻いて居る。これを仏陀の境涯から眺めると、どうしても冷然と見逃すことは出来ぬのである。世間の悟ったと云う人々から迷うている者を見た時には、唯彼は迷うて居る者だと云って、哀れを感ぜずには居られまい、まして大慈大悲の仏陀の遣る瀬のないお心から、迷い悩める人々を御覧になれば、如何にもして救ってやりたいと、その広大なる絶対の力をさしのべて下さるのである。例を以って、前の方法とくらべると、後者は、岸の上から仏陀が大慈悲の綱を下げられて居る、その広大なる力の綱にすがりて救われると云うのである。即ち自分の力を以て達しようとしても不可能なことを、上からさげられた綱にすがりつきさえすればおのずから助けられるのである。換言すれば仏陀の力によって救われるのである。

即ち前者は自力信仰であって、後者は他力信仰である。然らば他力信仰の真の味わいは何処にあるか。吾々が自己の力をたよって岸頭にのぼり得ると信じている間は、この有難い他力の味は到底わかるものではない。私は今この真の味について私の友人が信仰に入った実例をお話ししよう。

三

私の友人に西川という理学士が居た。理屈の上から仏を信じようと努め、そんな仏が居るなどとはどうしても思えぬと云って信ずる気になれなかった。ところが其人が遂に胃癌になり病床に苦しむようになった。或る時信仰を求めて苦しんだ極、枕頭に居る兄さんを省みて、兄さんは仏があるものと思われますかと叫んだ。

そこで私がかわって云った。君は仏の境涯がわからぬから信ぜぬと云うが、それは大きな間違いだ。吾々に岸の上の境涯がわかって居れば、今更に仏に助けて貰う必要はないじゃないか。吾々は実に生死岸頭の下に苦しんでいる人間である。吾々の信ずるのは岸の上を眺めて後に信ずるのではない。徒らに岸上を眺めて憧憬するのではない。唯吾々は岸の上から垂れて下さった救いの力を戴くことを有難いと信ずるのである。唯信鈔にも、

たとえば人ありて高き岸の下にありて、あがる事能わざらんに、力強き人、岸上にありて綱をおろして、この綱に取りつかせて、われ岸の上に引きあげんと云わんに、引く人の力を疑い、綱の弱からん事を危ぶみて、手をおさめてこれを執らずば、更に岸の上にのぼる事を得べからず、ひとえにその言葉に従って、掌をのべてこれを執らんに、即ち上ることを得べし。

仏力を疑いて願力を頼まざる人は菩提の岸にのぼること難し、唯信心の手をのべて誓願の綱を執るべし、仏力無窮なり、罪障深重の身をおもしとせず、仏智無辺なり、散乱放逸のものをも捨つることなし。唯信心を要とす、其他をかえりみざるなり。

と云ってある通りに、信仰と云うのは、理屈の角が折れて後に起きるのである。唯信じても、まだ救われるか救われないかわからぬから、一度仏陀の境涯を見届けた上でなければ、など言って仏の力を疑うようではトテモ信心は得られるものではない。唯信心の手をのべて誓願の綱を執りさえすれば、仏の大慈大悲は、悪人善人のへだてなく必ず救い上げられるのである。故に親鸞聖人も

善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや。しかるを世の人常に曰く、悪人なお往生す、如何にいわんや善人をやと。この条一旦そのいわれあるに似たれども本願他力の意趣にそむけり。その故は、自力作善の人はひとえに他力をたのむ心かけたるあいだ弥陀の本願にあらず、しかれども自力の心をひるがえして他力をたのみ奉れば真実報土の往生をとぐるなり、煩悩具足の吾等はいずれの行にても生死をはなるることあるべからざるをあわれみたまいて、願をおこしたまう本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人、もとも往生の正因なり、よって善人だにこそ往生すれ、まして悪人はと仰せられ候いき。

と仰せられている。で仏の親心から見れば、悪い子ほどかえって可愛いのであるから、自分のような者でも仏に救われるだろうかなど、そんな遠慮心をこちらからおこす必要はないのである。たとえば、先日の鉄嶺丸の沈没の際にも遭難者の中で、誰が一番先に救われるかと云えば、よく泳ぐことのできぬ者である。即ち善人なおもて往生を遂ぐ、いわんや悪人をやのお言業にかなうのである。他力の救いと自力の悟りとはすでにこの根本義において相反しているのである。悟りの方では、かえって善人を先にするが救いの方では全く反対である。ここにいたって他力の真の味がわかる、他力の救済の本音はここにあるのである。聖人はまた「往生ほどの一大事、もっぱら如来にまかせたてまつるべし」と言われている。南無阿弥陀仏、々々々とひたすら六字の名号を唱え、仏の力を信じ、岸上から垂れて下さった綱にすがりさえすればよいのである。ここまで話した時、西川君が、多年の疑問は釈然として晴れ、これより熱心な信心の人になった。同時に西川君の精神は大分変ってきた。君が今まで善だと信じ切っていた善は、未だ真実の善ではなく、今まで敵を愛し、他人に同情したと思っていた愛や同情は真実のものでないことを発見した。しかも君

の信心はいよいよ堅くなってきた。

こんなことは、独り西川君ばかりでなく、理論的に信仰を得んとする現今の青年にはよくあることである。なお私の信仰に入った動機をお話して見ると、私は自分の実行の上から考えて、自分が善くできると思っている間は、決して出来るものでないことを知ったのだ。

今日の社会を見渡して見ても理想の高い人程余計に苦しんでいる。自分の理想と現実の境遇とが不如意なのを苦しみ、不足に思い、自分の理想のために、かえって敵を作っている。トルストイは、世の中は無抵抗にさえすれば敵はないと言って。或はそうかも知れぬが、今人が右の頬を打った時にすぐにまた左の頬を向けて打たせるようなことが実際に処して出来るであろうか？　それが理想ならばそれもよかろうが、事実においてそんな事はトテモ出来ないのである。現実において無抵抗という事は到底出来ぬものだと知った時、私の心はモウ堪えられなく動揺し初めた。トルストイの無抵抗も信ずることは出来ぬ、自分の力一つで為し得ると信じていた事も実際には不可能であることを知っては、自己の力そのものの頼み甲斐のないはなはだ微弱なものであると感じて非常に苦しんだ。

この時私は、自力のたのむべからざるを知って他力の真の有難味を感じ、如来の本願とはここである、この弱き吾を救う真の親、真の友は仏であると気付いた時、私は安心した。他力によって救われたいと岸の下から岸の上を眺めて徒らの岸上を憧憬して居る者は、他力の中にあって、すでに自力の危きにおちいって居るのである。一向に専らその綱をいただいてこそ他力の本願は達せられるのである。

私はこれらの実験によって幸にその有難い綱をいただくことができた。嗚呼人生にこの仏あり、この恵みあってこそ、安んじてこの世を渡ることが出来るのである。顧みれば仏でなければ満足の出来ぬものを私は今まで不可能の人間に求めた、自分自身に求めていた。敵でない人を敵だと思うて居た、あにはからんや自分が敵であったのである。自分がすでに敵であっては、その敵をトテモ他人が愛してくれるはずはないのである。而してその者に対する真の同情者が仏なることをしらせて貰うたのである。

四

ところが、人生の要求には二つある。一つは人に対して求める同情であって、一は人生を救いたいという同情である。これを理想通りに得られると人はよく満足し安心することが出来るが、吾々相対の力では到底理想通りと云う事は出来ないために、前者の要求をもつ人は常に不足を感じ、後者の要求を持つ人は、世間の道徳の上からは感心なことであるが、時に力の及ばぬ事を悲しむのである。これは広大

無辺の力ある仏に求めなければ人間に求め、仏でなければ完全に出来ぬことを自分の力一つでしようと思うから、そんな不満足を感じるのである。

法然上人もはじめは自力によって安心を得ようとして、多年艱難な苦行をされたが、善導大師の「一心に専ら弥陀の名号を念じて、行住坐臥、時節の久近を問わず念々に捨てざれば、是を正定の業と名づく、彼の仏願に順ずるが故に」の一文を読まれるに及んで、吾より願をおこすに非ず仏より吾々を救うの慈悲にすがるのであると悟られたのである。

こう話して居ると考え出すのが、丁度昨年の今頃だった。私が吉井町に滞在して居る時に、滋賀県の大地震の急報に接して、そのまま近江の方に帰ったことがあった。その際、今上階下には北条侍従をおつかわしになってつぶさに被災者の家をたずねさせられて居た。この場合に北条侍従は如何なる方面から先におたずねになったかと云うと、被災者の中でも最も貧困な、最も哀れなもの、その災難を最もひどく負うた者からされて、漸次軽い者に及ぼされた。

これを実見した私は、善人なおもて往生を遂ぐいわんや悪人をや、の聖人のお言葉を思い出して、痛く感慨にふけったことであった。そして昨年はまた伊藤博文公がハルピンで横死を遂げた時に陛下からおたずねにおつかわしになった人は、矢張り北条侍従であったのを見て、わが陛下の大御心からわれわれ国民を見そなわされる時には、上公爵も下一布衣の身も、その御慈愛にいたっては変りなくお救い下さるのであると思って、私はまた痛く感激したことであった。仏の大慈大悲の御心もまたかくの如きもので、吾々常に六字の名号を念じて救いの綱にすがる者を仏の親心からは、貴賤上下、善悪男女のへだてなく必ずお救い下さるのである。

聖覚法印はまた唯信鈔に

名号はわずかに六字なれば、ハントクがともからなりとも保ちやすく、これを唱うるに行住坐臥をえらばず、これを行ずるに時処諸縁をきらわず、在家、出家、若男、若女、老少、善悪の人をもわかず、何の人かこれにもれん。

〝彼仏因中に弘誓を立つ、名を聞き我を念ずれば総て来迎せん。貧窮とはた富貴とを簡ばず、下智と高才とを簡ばず、多聞と浄戒を持てるを簡ばず、破戒と罪根深きを簡ばず。ただ廻心して多く念仏すれば、能く瓦礫をして変じて金と成らしむ。〟

このこころ、これを念仏往生とす。

と言われて居る、南無阿弥陀仏・南無阿弥陀仏、（完）

信を行く旅人抄

——二河白道——

池山榮吉

百千の道程をへだてた西の方に、理想的な都があるときいて、そこへ行って見たくなり旅に出た男があります。彼が今さしかかったのは、いとも淋しい曠野であります。彼のほかに唯一人通りかかるものもありません。ところへ彼の後へいつの間にか多数の悪漢と悪獣があらわれて、彼の一人法師なのにつけこんで、われさきに近寄って、彼を殺そうとするのです。彼はびっくりして、これはたまらないと、一目散に逃げ出しましたが、思いがけなく大きな河に衝き当ったのです。その河は、一は火の河で南にあります。一は水の河で北に横たわっています。二つとも広さはやっと百歩ばかりですが、深さは底が知れません。そして南と北とへ涯もなく延びているのです。だが不思議なことには、河と河との間に、道が一筋白くついて居ります。道巾はたった四、五寸ほどにしか見えて居りませんが、東の岸から西の岸へかけて、長さはやはり百歩です。けれども浪と焔があって、道の全面を濕したり、焦したりして、かた時もやむときがないのです。

旅人は河の前にたたずんで考えました。この河は南の方へも、北の方へもはてしなく続いている。真中に道が一筋白くみえてはいるが、はばがいかにも狭い。俺の命も今日が終りだ、とても助かる見込がない。あとへ引返そうにも悪漢、悪獣が間近に押寄せてきているし、南か北へかわそうにも、そつちの方からも悪獣・毒虫が競って向って来るし、そうかと云って真直にこの細道をたどって行けば、水の河か火の河か、どっちかに堕ちるにきまってる。こう考える間にも、何ともいえない恐ろしさが、ひしひしと身にせまって来る。で、さらに又思いかえすのでした。俺は今退いても死ぬんだ、止っていても死ぬ、進んだところでやっぱり死ぬんだ。どの道死から逃れられないなら、いっそこの白い道を通って前に向って行こう。道がついてる上か

らは、渡って渡れないこともあるまい、とこう思った時であります。東の岸で人の勧める声がするのです「思い切ってその道を進んでおいで、そうさえすれば死ぬ気遣いはない。そこに止っていると死ななくてはならない」という声がたしかにしたかと思うと、今度は西の岸の上から「一心にわき目もふらずに、すぐその道を通っておいで、私がお前を護ってあげる。だからもう水の中にも、火の中にも、落ちる心配は少しもない」と、喚ばわる声が聞こえるのです。こっちの岸では行け、むこうの岸では来い、という声を聞きつけた旅人は、深く心に決するところがあって、今はもう怯めず臆せず、自若として細い道へ踏み入れました。そして少し歩いたかと思うと、東の岸に取残された悪漢達は、声を合わせて呼ぶのでした。おい、おい旅人よ、早くくこっちへ帰って来ないか。こんな危い道が通れるもんじゃない。命をおとすこと請合だ。俺達はお前にむかって、ちっとも悪意があるんじゃない。だから安心して帰って来るがいい、と呼ぶ声もきこえるのでしたが、旅人はそれに耳を借さないで、ただ一筋に白道を進んでまいりますうち、やがて西の岸に着いて、とこしえに諸の悩みからまぬがれ、善い友達と心からの交りを結んで、身にあまる喜びに生きることとなりました。

これが二河白道の話ですが、さすがに三大譬喩の一つと云われるだけ、ほんとうによくまとまっています。入信の過程がきわだって描写されています。それは入信の一過程ではなくて、ほとんど過程そのものの感があります。善導大師は、信心の行者がいたずらに他のいろいろの見解に惑わされないようにと、信心を護るために書いたとありますが、大方大師自身の入信の体験にもとづいて作られたものでしょう。ですから入信の体験のある人々は、自然この譬の中に、他人事とは思われない真実さを認めるのが常であります。

源信僧都は、この譬喩をきくことの出来たのは、人間と生れた所詮であると悦ばれたと伝えられています。親鸞聖人も非常にこの譬に感じられて、高僧和讃に「貪瞋二河の譬喩を説き、弘願の信心守護せしむ」と、善導大師の偉績を讃歎する資料として、これをあげられました。また信巻には、その全文が引用されており、その釈まで載せてあります。

なお一応、主に大師の自釈にしたがって、譬の意味のあらましを申してみましょう。

東の岸とはこの火宅無常の世界、西の岸とは安養浄土のことです。悪漢、悪獣、毒虫というのは、一口に言えば煩悩のことです。さびしい曠野とは、友達という友達が、みな欲にかけまわる者ばかりで、信仰に導いてくれる者が一人もない孤独の感をたとえたのです。火の河、水の河は、貧愛と瞋憎の象徴です。白道とは、泥水の中から白蓮の咲き出るように、煩悩に荒れ狂う心にも、金剛の信心の授かる可能を、また一には、貪瞋の煩悩は水火のような強烈なのに引きかえ、肝腎の信仰はとかく力弱い対照を象徴したものであります。聖人は、白は黒の対で、白はすなわち選択摂取の白業、黒は無明煩悩の黒業。道は路の対で、道は本願一貫の直道、大般涅槃無上の大道、路は万善諸行の小路だと見ていられます。東の岸の声とは釈尊の説教、西の岸の声とは、本願招喚の勅命を指ざされたものです。

さて意を決して白道に足を踏みいれるというのは「弥陀の智慧をたまわりて、日ごろのこころにては往生かなうべからずと思いて、もとの心をひきかえて本願をたのみまいらする」一生にただ一度あるという廻心のことです。

白道を進みかけた旅人を呼びもどそうとするのは、無信仰、または反信仰、または信仰を異にする人達からの誘惑を象徴し、西の岸について善い友と会って喜ぶとは、「戒行慧解ともになしといえども弥陀の願船に乗じて、生死の苦海をわたり、報土の岸につきぬるものならば、煩悩の黒雲やはく晴れ、法性の覚月すみやかにあらわれて」大般涅槃の証のひらけることを示されたのであります。

親聖聖人が磯長の太子の廟所に参籠された頃は、確かに曠野の旅人であったでしょう。六角堂に百日の懇念をいたされた頃は、二河の前に立たれて、生きるべき道がみつからなくて、途方にくれていられた時です。吉水の禅房における法然上人のお話は、東岸のすすめる声であると同時に、上人を如来の権化と仰ぐ聖人には、そのまま西岸の喚び声と聞こえたのです。爾来六十年の聖人の御活躍は、白道を行く旅人のあゆみです。

「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よき人の仰せをこうむりて信ずるほかに別の子細なきなり」これが私への東岸の声であったことを、いつも詳しく申上げました。爾来十有幾年、愛欲の波をかぶり、瞋嫌の焔にあをられながらも「ただ念仏して」白道の生を続けさせて頂くのは、ひとえに心光の摂護によるところでございます。「誠に知んぬ、悲しいかな愚禿鸞、愛欲の曠海に沈没し、名利の大山に迷惑して、定聚の数に入ることを喜ばず、真証の証に近づくことをたのしまず、恥ずべし傷むべし」の聖人の御述懐は、私に代って云いにくいこと

を云って下さったお言葉です。

信仰をいただいたら、おのずから、心が清まるものと、かっては想像していたのでしたが、それは善人となれは往生できるという通途の相対的の考え方による無理もない誤解です。中心から外周まで、まるきり煩悩で固まっている炭団ですもの、いくら信心の磨きがかかったからといって玉になるはずがありません。「持戒持律にてのみ本願を信ずべくば、われらいかでか生死をはなるべきや」です。心の清まるのが信仰の誓約であろうなら、私にはそうした信仰の確立する時機がありません。それをお見抜き下さっての悪人救済の本願が絶対他力のありがたさであり、絶対不二の教である所以であります。

私どもの姿がうつるのはこの教の鏡です。この他力の鏡です。この鏡の絶対性は、私共にその真相を凝視出来ることを保証します。この保証があればこそ、私共は鏡にうつる己が影を見てまことによくよく煩悩の興盛に候にこそ」と、聖人の自覚が獲られるのです。と同時に、究竟の理想成就の上には、他力の絶対性がなくてはならぬことがうなづかされ、その半面に自力作善の相対的善人根性が否定されてしまいます。自力作善の心のやまないのは、まだ絶対他力の鏡に照らされていない証拠です。

我ならぬきよらの我の我にありて
　穢悪の我を　我にしらしむ

これは私の近詠です。きよらとは清浄ということです。清浄の我が私の中にあろうはずがありません。もしあるとすると、それは私ではありません。しかし私に、私の本質が穢悪の我と、どうして知れるでしょう。それをそうと知らせるのが、きよらの我ではありますまいか。私でないきよらの我が、いつ私の中にはいったのでしょう。それは、一声「念仏申さんと思いたつこころのおこるとき」にはいったのです。子を思う母が、子の中にあるように、私を思うきよらの我は、私の中にあるのです。そしてその選択摂取の白業をもって、私の無明煩悩の悪業に対照せしめて、私に「穢悪汚染にして清浄の心なく、虚仮諂偽にして真実の心なし」と気づかして下さるのです。

貪瞋煩悩の中に生ずるという清浄願往生心とは、この我ならぬ我のことを指すのでしょう。或は本願廻向の大信心といったり、或は如来選択の願心というたり、或はまた一口は信仰といい、念仏というのも、つまり別のものではないでしょう。すなわち信心の念仏が我ならぬ我なのです。実を申しますと、私にはその我ならぬ我と一緒に、もう一人私の中に居る人があります。それは外の人ではない聖人です。聖人も私の中に居て下さって、私共の穢悪性を戒めるというよりは、むしろ一緒に歎いて下さいます。この意味で聖人も、私にとっては我ならぬ我であります。

浄土真宗に帰すれども　真実の心はありがたし
虚仮不実のわが身にて　清浄の心もさらになし

西に心は向きながらも、ゆくさきざきの名所旧蹟や、通りかがりの村里の催しものに心をひかれる旅人であります

疲れた旅人の　あうぎみる大空に
さまざまの姿して　わきあがる雲の峰

わきあがりやがてまた　くずれゆく雲の峰
あわれそのさだめなき　まどわしの姿かな

わが辿る運命の　はてしなき旅の空
われはまた日毎見る　たのみなき雲の峰

群賊悪獣の煩悩につきまとわれて、曠野をたどる旅人の姿です。さまざまのまどわしの姿した。名利の幻影がはかなく崩れゆくあとから、さらにまたわきあがる愛欲の雲の峰。わきあがりやがてまた崩れゆく雲の峰です。幻滅又幻滅、さだめなきがさだめなる流転の旅。私の人生の旅は恥かしながらこうしたものです。

「あれは旅人だ。あの峻しい山をこえて来たのだ。のぼりつめたらあると思った花の都の予想がはずれて、また荒涼たる曠野に出たのだ。彼は今がっかりして、崩折れるように道ばたの石に腰をおろして、額を手にささえている。その手の指のさきまでも、すっかり力が抜けているのだ。のぼりながら胸一杯に吸いこんだ多彩の憧憬は、暗い幻滅の吐息となって、彼の口からもれている。おや！　一人旅かと思ったら優しい少女がついている。少女は彼をいたわって、しきりにその背を撫でている。そして何かうたっている。なに？〝苦悩の有情をすてずして〟だって？――少女の仰ぐ天の一方から虹のように一条の光明がさして、旅人の身にかかっている」

これは私の或日の日記です。少女の名は信子といって、私にさずかった娘です。

私の通って来た道を振返ってみますと、数々の高い山をよじのぼり、深い谷をおりました。これまでそうであったように、これからも恐らくはそうでしょう。一体私は山のぼりが好きで、どうも平地にながくじっとして居られない性分です。これからさきもきっといくつかの山登りが続くでしょう。

「あたら身を仏になすな花に酒」無明の酒に酔いしれたみ

にくさを、他力の鏡に見てとりながら、耽溺の夢からさめる気力もない、まことに無慚無愧の甚だしいもので、これから悔い改めるというのは、あまりに見えすいたうそです。「衆生花に酔はば済度に我にさめん」さうした悪業に引きずられる私を、一人子のように思召して、どこどこまでもお見捨てない親心を仰ぐとき、何とも云えない頼もしさを感じます。朝日ににおう山桜をみては、心が花に吸いとられて、胸がすうと開くかと思うと、花が心を占領するように、弥陀の御恩の深重さがしみじみと思い出される胸の中には、おのずから念仏と共に、御親の心がみちるのを覚えます。

無明長夜の燈炬なり　智眼くらしと悲しむな
生死大海の船筏なり　罰障重しとなげかざれ
願力無窮にましませば　罪業深重もおもからず
仏智無辺にましませば　散乱放逸にすてられず

このさきどんな山路をたどろうが、どんな幽谷をさまよおうが、はたどんな曠野に行き暮れようが、きっとついて離れないで、手を引いてくれるのは信子でしょう。そして私の唯一の息杖となってくれるのが念仏です。願わくばこうして皆様と御一緒に、「念仏者は無碍の一道なり」の金言を体験して行きたいものでございます。

福島政雄先生「身記記」より

○

久遠の黎明

弥陀の誓願の不思議が私の胸にひらけました風光は、久遠の黎明に接したとでもいうべき心持でありました。久遠の黎明というのは、いつまでも夜明けという心持がつづくことをいうのであります。いつもはじめて光に接するという心持であります。

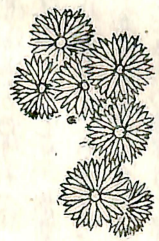
○

不思議の世界

善人は救われ、悪人は救われないというのが人間社会の常識のようであります。

すくなくとも善は救済のたすけになり、悪はそのさわりになると考えるのが常識であります。

この常識から言えば、誓願不思議の世界などは不可解であり、不可思議でありましょう。



御一代記聞書抄（続・一三）

弥陀をたのめば、南無阿弥陀仏の主になるなり。南無阿弥陀仏の主になるといふは信心をうる事なりと云々また当流の真実の宝といふは南無阿弥陀仏、是れ一念の信心なりと云々（第二三七条）

一

世間で自律・他律ということが言われます。自律とは自分の純粋意志で自己の行為を決定すること、他律とは自己の意志以外の他の力に支配されて自己が動かされること、大まかにはこうした意味に用いられます。そうすると、時として起る誤解は、他力というのは自分の力ではないところの仏という他者の力に自分を託し、唯他力に従属する身となるのであるから、それは他律の状態ではないかと考えられることです。

西洋の宗教のように、人間を超越した実在の唯一神が、世界を創造し、人間をも造り、歴史を支配し審判を行う、という人と神との関係にあっては、神の意志こそ絶対最高であり、神と人間とは創造者と被創造物として二つにはっきり分けられますから、神の意志に従う信仰はむしろ人間の意志主体を無視するものであるという考えに立ち、十九世紀の思想家ニイチェはキリスト教道徳を奴隷道徳と酷評しました。そうした思想の是非は別として、とにかく、二元的な宗教形態からは隷属の信仰という性格が出て来ざるをえない要因があります。

井上善右衛門

ところがこの点、仏教には大きな趣きの違いがあります。仏とは究極の宇宙的真実に目ざめ、その真実に一体化した活動態が仏であります。親鸞聖人は『教行信証』の証巻に「然れば弥陀如来は如より来生して、報・応・化種々の身を示現したまう」と申されています。如とは一如のことであり、一如とは真如のことです。真如とは一切をつつみ

貫く究極の「真実そのもの」この意を中国の学者が真如と翻訳しました。

今日では真理という言葉が一般的によく用いられますが、真理とは真の理の意ですから、言葉としてはどうも冷たい言葉です。真実そのもの、真実自体を指す真如というのは深い奥行きをもつ言葉と感じます。この真如があらゆる活動を我々に対し応じて現じられる。それが即ち法蔵菩薩であり、阿弥陀仏であり、本願であり、そこに成就された真実そのものの徳が南無阿弥陀仏であります。

阿弥陀如来が如より乗生されると聞きますと、真如が先ずあって後から如来が出現されたかように解されますが、それは時間という人間に先天的な思考の枠から生じる思いであります。真如はそのような時間空間の形式に制約されたものではありません。従って真如と阿弥陀如来とは表裏一体であって、時間的前後を差しはさむべきものではありません。

二

真如は究極の宇宙的真実ですから、私どもはもともとその真如の中におさめとられています。真実の中にありながら、それに気づかず、執我の殻に己れを鎮して迷いに迷いをつづけてきたのです。直如は向うにあるのではなく、私を包み尽くしているのです。もと一体の中にありながら我執の性がそれをへだててきました。その我執の性が如来の御催しによって破られることが南無（帰命）であり、その端的に如来の真実功徳がそのまま此の身のものになって下さることが南無阿弥陀仏ですから、「弥陀をたのめば南無阿弥陀仏の主になるなり」と申されました。おうけなきことであります。

我性の我れに入れ替って阿弥陀仏がこの身の主体となって下さる。池山榮吉先生の言葉を借りれば「我れならぬ清らかの我れ、の我れありて……」ということであります。我性の己れ、有漏の穢身はそのままここにありながら、最早やそれは我が命の主体ではなく、南無阿弥陀仏という真実功徳の体が勿体なくも、我が命の主体となって下さっている。その妙なる趣きを「南無阿弥陀仏の主となるなり」と申して下さったのです。主とは南無阿弥陀仏と一体の身ということです。まことに仏法は奇しき生命の真実を知らせて下さいます。そこには向うの阿弥陀仏に追従してお念仏申す様相は消えています。

曇鸞大師が「動静己れに非ず、出没必らず由る」と申されたのも、今までの己れが消えて南無阿弥陀仏が私の主体となって働いて下さる様子を語られたものです。それが念仏における仏と私との関係であります。そうなると『臨済録』に「随所に主と作れば、立処皆真なり」とあるのも、念仏において実現される真実相に外なりますまい。

三

しかし、このように述べますと、南無阿弥陀仏と私が一体となり、仏の中の私になってしまったかのような思いになるならば、それは観念沙汰の大きな誤りであります。真の宗教体験は合理的思考のような一本筋のものではありません。

地獄ゆきの私がしみじみと味わい、れ、南無阿弥陀仏がその私をどこまでも摂取して下さっている大慈悲の中に、我れを忘れてほれぼれと本願を仰ぎまいらする外はないのです。そこに奇しくも南無阿弥陀仏の主とならしめられる己れが法爾として顕現します。二つにして一つということは、論理的にいえば一筋道ではありませんから矛盾でありましょう。しかもその矛盾の中に大きな統一の光が成就されている事を仰いで念仏の徳に驚歎するのです。

そうした消息を前の句を打ち返えして「南無阿弥陀仏の主になるというは信心をうる事なり」と示され、信心の外に「南無阿弥陀仏の主になる」という事はない、南無阿弥陀仏の主になるとは信海の風光であると申されているのであります。こうしたこころをよくよく味わいますと、念仏が他律信仰でないことはもとより、世にいう自律ということでもまたない事が知られます。自己の意志によって成り立つ信海ではなく、人間の意志力を超えて遙かに大きな本願力の然らしめる。自己自身の生命的転換でありますから、強いて言うならば、自他を超えた絶対自律とでもいうべきでありましょうか。

このような驚くべくすばらしい出来事を再び讃えて「当流の真実の宝というは南無阿弥陀仏、是れ一念の信心なり」と申されているのであります。「真如一実の功徳の宝海、無上宝珠の名号」といわれ「満足大悲円融無碍の信心海」とたたえられている信心の深い真実を頂戴いたしましょう。

——昭和五五、十月三日校了——

ゲエテ語録

自分は長い間、多少とも有名な人の伝記を研究した結果、こういう考えに達した。

世間を識物にたとえてみたら、その幅をただ広くするだけの役に立っている経線（たていと）になっている人と、それをしっかり織りあげるのにかかわって力のある緯線（よこいと）になっている人と、二通りの人がある。

欧州巡遊寸感

——ごめんください——

西元宗助

ごめんください。私ども夫婦、あるツアーに参加して、十二日間ばかり、ロンドン・ローマ・ジュネーブ・パリと駈け足で巡遊させていただきました。まだ欧州にいかれたことのない方々には、ちよっと申訳のないことでしたが、私どもの年に免じてお許しください。またこのような巡遊記は、たいてい、ひとりよがりの自己満足。わたしのこれもその類で、さぞお読みづらいことと思いますが、でも万一、お目を通していただければ嬉しいことでございます。

(一)

八月二十六日。ジャンボ機はアラスカのアンカレジ空港附近にて、はるかに白雪の荘厳なるマッキンレー山系（主峰・六千二百米）を遠眺しつつ、北極のさらに北を廻って氷海を越え、グリーンランドの上を通って滞空、約十七時間。ロンドンのヒースロー空港に向う。

四百余名を乗せた怪物ジャンボ機が、どうして飛べるのか。しかも音速に近いスピードで北極圏のあたりを飛ぶなどとは、空おそろしい気持ちがする。そういえば、出発の前々日、万一のことを思い、ひそかに遺言状を認めたことであります。

(二)

霧の深いロンドンで、最も印象の深かったのはロンドン塔。「わが運命の星は暗かりき」と、今もなお、幽閉の王子の歎きの声が、古壁の彼方から聞こえてくるようでありました。そういえば漱石の「倫敦塔」にも出てくる黒い大きな鴉（からす）が五羽、塔の窓にとまっていました。

いずれにしても英国は、—そして多分、伊太利も—過去の栄光の陰に生きているという感が切実で、—たとえばバツキンガム宮殿の仰々しい毎日の儀杖兵の交替式にみられるように—アメリカとは、そして日本とも、非常に対照的であるように思われた。

(三)

八月二十八日の午后にはローマ郊外のバチカンのサン・ペトロ大寺院に参る。ここで、はからずも「歎きの聖母マリヤ」—ピエター—の大理石の像を見つめた瞬間、電撃にあたったように心うたれる。これは十字架からおろされた、息き絶えたイエスを抱きかかえる聖母マリヤの像で、かの有名なミケランジロの作

家内はカメラを手にしたものの、あまりの厳粛さに—いや、かなしみに、しばし摂ることを躊躇する。

悲しみにみちたマリヤの面影は、今もなおわが眼底にある。それは子を不意に亡くしたものの尽きぬ悲しみ—無音の慟哭の象徴であった。聖堂を一巡した私と家内は、仲間の一行から離れて、再びこのピエタの前にたちつくした。

(四)

八月三十一日、この日も快晴。レマン湖畔のジュネーブの街を歩いてホツとする。ロンドンもローマも、場所にもよるが概して清掃がゆきとどかず、それに治安状態も必ずしもよくはなかった。しかしここジュネーブは街全体が清潔で、添乗員君も、ここはひとりで夜歩きしても大丈夫というほど。

わたしたちは観光バスで、ルターと並ぶ宗教改革の大立者カルバン（カルビン）や、ジヤン・ジヤツク・ルソーの記念碑を巡り、いたるところにバラの花や野の花の咲き乱れているのを見、さすがは、ペスタロッチやアルプスの少女—ハイジの国スイスと感じいる。

その翌日はアルプスの最高峰モン・ブラン観光のため、ジュネーブからバスで国境を越え、約二時間してフランス領のシヤモンの村に向う。その沿道の谿谷の素晴らしかつたこと。

そしてこの有名なシヤモニで、われらはロープ・ウエイを二度も乗換えて、富士山よりも高いシデイ針峰の頂上に遂いに昇りつく。そしてその展望台に立った瞬間、アッと息を呑む。見よ、白雪皚々たるモン・ブランが右手に、端麗なるグランド・ジョラスが左手に、その間に千古の氷河が。まったく身も心もしびれるようなーたしかに気温も零下一度前後—ハイリヒな気持になった。

(五)

九月二日、ジュネーブから汽車でパリに向う。さすがにパリの街々は美しかった。殊にセーヌ河畔のルーブル美術館にたどり着いたときは、はるばると訪ねてきてよかったと思う。またシテ島にあるノートルダム寺院に参り、ステンドグラスの美しさにも心うたれる。なおノートルダムとは、われらの聖母マリヤという意味であることを知った。そして私は又しても「歎きの聖母マリア」の像を想うこと

であった。

○

いよいよ日本に帰える日は近づいた。土産品は少しは買いたいと、地下鉄に乗ってシャンゼリゼの通りに出る。ロンドンでもローマでも、そうであったが、いたるところで日本人の旅行者にあい、いたるところで日本の自動車、カメラ、それに電気製品を見る。イギリスやフランスの新聞の広告にまで、トヨタ、ソニー、ホンダ、それに時計のセイコーまでその名が。

日本はいつのまに、このような国になったのか、多少誇らしくもあったが、しかし考えさせられることも多かった。それはローマからシンプロン・トンネルを通ってジュネーブに向う汽車の中のことであった。同じコンパートメントのイタリヤ人から、日本人は世界一の働き者、しかしエコノミック・アニマルではないかと、そんな風にいわれたとき、わたしは返えす言葉もなかった。

私にはイタリヤ語は判らない、しかしそのときは多少の英語をまじえてのことで、ともかく、そのような意味のことを、親切そうな人のよいカトリック教徒のイタリア人から云われて、あらためて考えさせられたことでありました

○

ともかく楽しい有難い旅でありました。それだけに、なんだか相済まぬ気がしないでもありませんでした。帰宅してお仏壇の前に手をあわせたとき、ほんとうにしみじみとした気持ちになりました、妻も私も。そして私どもの人生の旅路は、まだまだこれからと、思うことでもありました。ご恩報謝のためにも。

明日は、明日こそ　　ツルゲーネフ

暮れ行く一日一日の、何と空しく味気なく、甲斐なきものに見えることぞ。

その一刻一刻の何と愚かしく、無意味に流れ過ぎたことぞ。でもなお、人は生きたいと望む。生を重んじ、希望を未来につなぐ。

ああ人は、どんな幸せを未来にまつのであろうか。一体なぜ人間は、そんなことは思い描きもしないのだ。人はもともと思考を好まない。そしてこれは賢明というべきだ。「明日は、明日こそは」と、人は己れを慰める。この「明日」が、彼を墓場に送りこむその日まで。

（一八七九、五月）

念仏詩抄

木村無相

それを知ってござるは

香師おおせに
〃五劫の思案〃
知らぬ者はなけれども
その大悲のおんムネに
浮かばせられたれば
この私でござりますと
知るものはすくない――〃

それを知ってござるは
聖人さま――
〃弥陀五劫思惟の願を
よくよく案ずれば
ひとへに親鸞一人が
ためなりけり――〃

香師＝香樹院徳龍師

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

不思議のモトは

香師おおせに
〃かかる本願
建てさせられたも
不思議なり
かかる本願
聞く身になりたも
不思議なり――〃

不思議のモトは
仏心なり
観経さまに
〝仏心とは
大慈悲これなり〟

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

ご恩は無限

香師おおせに
〝喜べぬを苦にするは
往生のサワリにはならぬ
喜べば喜ぶほど　ハズ
喜び足らぬと苦になるバス
ご恩にかえらるるもの
無きゆえなり――〟

ご恩は無限
感恩はしれてる
喜びつくせるものでない

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

ナムアミダブツは

香師おおせに
〝腹の立つ時念仏すれば
おのずから如来のお慈悲に
心がやわらげられるるゆえ
称名念仏おこたらぬよう〟

ナムアミダブツは
お慈悲のカガミ
腹立ち照らして
やわらげたもう

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

アヤマリ知れるも

香師おおせに
〝これだけ後生願うもの
これだけ念仏申すもの
なんで仏になれぬことが
あろうかと思うゆえ
アヤマリが出来る――〟

後生願うも如来の念力
念仏申すも如来の念力
自力じや後生願われぬ
自力じや念仏申されぬ
アヤマリ知れるも
如来の念力――

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

片手（かたで）しごと

香師のおおせに
〝片手ごとの
大もうけ――〟

片手は名利
片手で聴聞
お浄土まいりは
片手しごとの
大もうけ

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

如来の誓願は智愚の毒を滅す

花田正夫

煩悩具足の身の悲しさには、善人は金の鎖、悪人は鉄の鎖に縛られ、智者は慢心の毒、愚者は愚痴の毒に害せられる。かと云って、煩悩の塊の身には、泥人形をいくら洗っても泥ばかりで、泥を洗除することは出来ない。

歎異抄三章に「煩悩具足のわれらは、いずれの行にても生死をはなるることあるべからざるをあわれみたまいて、願をおこしたまう本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人もとも往生の正因なり」

と、親鸞聖人が御身にかけてお示し下さるのも、善悪の鎖、智愚の毒にいつまでも苦悶せねばならぬ身を慚愧されるとともに、如来の誓願は、こうした我々をかねてしろしめして、たすけんがために発起して下されたことよと、随喜されたのである。

今やそのお誓は成就されて、善悪・智愚に迷う者の上にその光芒は放たれている。まづ釈尊の御生涯の上を仰げば一句の法文さえも覚えられない愚者のシユリハントクが、その愚さの故に「仏法の器にあらず」と兄から叱責せられて、大苦悩におちた時、釈尊の御導き「ハントク泣くのをやめよ、真の愚者とは愚かな癖に賢いと思っている人である。愚者が愚を知るのは正しいことである。」と淳々と慰藉をうけ、やがて大きな悟りの人と転じている。

また、四姓の差別のきびしい印度で、最下層のセンダラ種に生れ、日々肥汲みを業としたニダイが、釈尊の大悲に浴して心垢が洗除せられて、国王達も尊者と称えるようにまで転じている。

反対に、舎利仏の叔父で梵行を長年修し、長老として尊敬された長爪梵士（マカクチラ）が、己が智を誇っていたが、舎利仏がすでに仏に帰しているので、仏所を訪い、仏前に立って「私は一切の説を否定する」と豪語した時、釈尊はすかさず

「汝は一切の説を認めないと云うが、その認めないという

ことが汝の自説でないか。ただ自説だけを認めて、理由もなく他説を認めないのは、既に邪見ではないか」

と、従容として迫らぬ釈尊の御態度と、電光のように自分の説の根底に迫って来る不思議な徳にうたれて、たちどころに仏弟子となり、論議第一と称せられるに及んだ。

この他例をあげると限りのないことであるが、譬えてみれば、夜の間にこそ、ローソクや、油燈や、電燈が、その光を競うが、ひとたび太陽が照り輝くと、一切それらの光は、その力を失って、しかも同じ陽光の中に包まれる。仏陀の徳光の前に、智者は慢心を愧じ、愚者は卑屈の垢を洗はれ、善悪の業繋から解放せられて、広いやすらぎを恵まれるのである。

以上は釈尊の時代の出来事をあげたが、先年印度に、新仏教が非常な勢で盛りあがった。大類純氏の著『釈迦』によると大体次の様である。

「一九五六年の南方仏紀二五〇〇年の祝祭日に、アンベーデーカル博士の指導のもとに十万人という多数のヒンヅー教徒が仏教に改宗し、その後二ヶ月を経て博士は急逝したが、その葬儀場で再び十万人のヒンヅー教徒の改宗が行われ、其後各所で引続いて改宗があって、今ではすでに三十万人の新仏教徒が出来、印度仏教の再興が真剣に考えはじめられた。再興というのは、釈尊が仏法を興して下さり、その後龍樹、天親の菩薩が大乗仏教をひろめて下さったが、その後千五百年間、仏蹟だけとなって、仏教の影は薄らぎ果てていた。それなのにこの新仏教運動が爆発的に起ったのは不思議なことである。

さてアンベーデーカル博士は、印度の厳しい階級制度の中で、最下層の不可触賤民と卑しめられる種族に生れ、あらゆる蔑視と迫害の中に長年身を挺して、それを越えて来た人で、その言語に絶する苦難の中にあって、仏陀のおへだてのない平等の大悲一つを灯火とし、力として支えられて来た体験から、仏教の復興以外に、印度の長年にわたる矛盾の解決なしとの不動の信念を持つ人であった。それが同じ差別と蔑視の中に虐げられる人々の心をゆり動かしてこの集団的改宗が行われたのである」

とのことである。私はこの集団的改宗の底にひかるものの即ち、長年の間、最下層とせられた種族に生れ、ヒンヅー教の厳しい差別、侮蔑、非人同様の扱いの中にあって、何ものにも障えられぬ力をもって博士を支え、常に希望の光を与えた仏陀の平等の大悲心に、ただ感泣せしめられる。

あとがき

脚早やに冬が顔を出して来ました。何かと心忙しいことでありましょう。御健勝を祈念申し上げます。

近角先生がよく、字を書くにも絵を描くにも紙がいる。信心の世界も人生の紙の上にあらわれる、と云われましたが、人生に直結した信の消息をこまやかに述べられたものを頂きました。

池山先生の文は、大阪の学生仏教青年会でのお話の中から転載いたしました。二河白道の譬は、キリスト教でのバンヤンの天路遥程にならべて、求道者の枝折といわれます。あとに生れた者の幸せには、こうした先覚者の道しるべをうけられることであります。

井上様は、二にして一、一にしての二の、絶対他力の妙趣を讃仰して下さりました。相対分別の智慧で、二元対立の世界から出られない我々は、とかく仏の御真意を受けとれず、相対的他力にとどまることを指適して下さいました。

西元様は、欧州巡遊の旅から、感銘の深いことどもを誌して下さり、井戸の中の蛙の生活をしています私には驚きでありました。名古屋の某医師は、自分の不治の病を知ってから、御夫妻で未見の欧州の旅をして名残りを惜しんで来られた人もありました。

木村様は、心臓の方は症状もすくなく順調でしたが、この冬を用心して下さるようにとひそかに念じております。大阪の榎本栄一様が「木村さんの詩に、念仏の純粋な妙味を覚えます」というおたよりがありました。中国に寒山と拾得のことが有名でありますが、木村、榎本のお二人は呼吸のよく合った現代日本の寒山拾得にたとえられます。

さて、私共は、善を求め、智を求めていますが、煩悩熾盛の身の悲しさに、或は鎖となり、或は毒となって、自他共に害ねることに気づく時、仏かねてしろしめして、そこにさしのべて下さる救いの綱をいただいて、業繋を断たれ、毒汁を転じて下さる御恩を仰ぐばかりであります。それにつけても、白井先生の御歌を思い出されます。

わが罪の狂ふ荒野も無碍光の照らしたまへば何をか恐れん

弥陀仏のみちかひゆゑに天地のおのづからなる寂けさに入る

慈光　第三十二巻　第十一号　昭和五十五年十一月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日　第三種郵便物認可

〈御案内〉

○毎月第一、第三日曜、午後一時半
一道会例会。一道会館の南隣り、南区駈上町二の八六。鬼頭康彦氏宅
市バス、新郊通り一丁目下車、東入ル三筋目、角。
地下鉄、新瑞橋終点下車。

○教西寺、法話会。昭和区小桜町二丁目四
毎月二十四日、午前・午後。
市バス、御器所通り又は北山下車。
地下鉄、御器所通り下車。

○蓮光寺修道会。毎月七日午後一時半。
（但し日曜を除く）尾西市三条板倉
名鉄新一宮駅よりバス、西三条下車。

定価　半年　七〇〇円（送共）
一年　一四〇〇円（送共）
編集・発行人　名古屋市南区駈上町二ノ八八　花田正夫
電話八二一局七〇三七番
印刷人　愛知県西加茂郡三好町大字福谷　坂部光雄
発行所　名古屋市南区駈上町二ノ八八　慈光社
振替口座　名古屋　一〇四七〇番
郵便番号　四五七